

# 全員主役。 1人ひとりが輝く会社

—株式会社沖縄教育出版—

職場  
レポート

## WORKSHOP REPORT

(文) 清原れい子 (写真) 小山博孝



配送センター

### 株式会社沖縄教育出版

〒900-0013 沖縄県那覇市牧志1-2-24  
TEL 098-866-4779 FAX 098-867-6677  
URL <http://www.cha-genki.co.jp>

## がんを体験 「お役立ちの経営」へ

沖縄県那覇市のメインストリート、国際通りのほぼ中央に「株式会社沖縄教育出版」がある。ビルの5階と6階が「沖縄自然館」の名で展開する健康食品の「チャージんき事業部」と化粧品部の「真粧品事業部」のオフィスだ。

「メンタル面がいちばん大事」という社長の川畑保夫さんは、写真やホームページで拝見するよりもさらにお元気そうで、生き生きとしたエネルギーを感じさせる。

川畑さんは1977年に「沖縄教育出版」を創業、出版事業をスタートさせた。

「沖縄は本土と違いますから、最初に買っていたいたお客さんを大事にして、植物図鑑の次は海、歴史……などと出版していきました。当時も社の理念は掲げていたのですが、実際は儲けたいとか会社を大きくしたいとか、理念とかけ離れていたと思います。出版の流通革命を考えて、次に鹿児島教育出版を作ったのですが、そのうちにストレスから『腎臓がん』になりました」と川畑さんは言う。

国立がんセンターに入院。がんの告知を受け止め、何をやるかではなく、何の



川畑保夫社長

ためにやるかを考えた。

「生きていることには限りがある。生命体は宇宙からの借り物で必ず土に帰るが、命は受け継いでいくもの。沖縄の強みは長寿世界一です。自分のがん体験を通して、お役立ちの経営をしたいと健康食品の事業部を立ち上げました。さらに肌と心と環境にやさしい化粧品を作りた」と真粧品事業部をスタートしました」

94年に立ち上げた「沖縄自然館」では、沖縄のウコン、玄米酵素、もろみ酢などを原料にした健康食品と、自然の素材を生かした化粧品を扱っている。従業員は151名。自己資本比率95%超。年間経常利益は3〜4億円と、事業は順調に発展してきた。

企業理念について、川畑さんは「地球上に住むすべての人々が健康で平和に暮らせる社会をつくるため、みんなで力を合わせて、働きがいのある楽しい職場環境を創り、お役立ちの喜びを実践するこ

## 障害者はパートナー 多様性のある企業は強い

と。五徳の中で特に仁を大切にしています。文化や教育などのCSRに力を入れ、地域のコンサートやシンポジウムにもボランティアで協力しています」と語る。

社内ではお互いをファーストネームで呼ぶ。川畑保夫社長は「保夫さん」。呼び方が定着するまで練習をしたそう。

「労使は対等な関係、パートナーですから、『さん』づけです。障害と健常、パートと正社員の枠組みを超えて、『共に学び、共に育ち、共に働き、共に生きる』社会の実現を目指しています。正しいことを正しく行えば、正しい結果が出ます。人間尊重の理念で経営すれば、必ず結果は出るはずですよ」

川畑さんが中学1年生のとき、カリエス（骨の慢性炎症）を患っていた年上の同級生と仲よしだった。障害児教育に長年携わった鹿児島県の養護学校の校長先生の原稿を出版したこともある。「障害」との接点はあった。しかし障害者雇用の直接の動機は、講演に感銘を受けたことだと川畑さんは言う。

「一番のきっかけは、2000年2月にオムロンの上石一真会長の講演を聞いて感動したことです。その年の10月には大分の別府太陽の家に行つて、ホンダ太

# 職場 ルポ



まずは、オリジナルのワッショイ体操、ハッピー体操で朝礼が始まる

陽社長の鈴木さんから、『心身に障害があっても仕事に障害はない。税金の消費者から納税者に』という話を聞き、私も障害者を雇用しようと思いました」

01年に軽度と中・重度の養護学校に出向き、2人と1人を採用。大学卒で同期入社した2人が面倒を見ることにした。川畑さんは「障害者はパートナー、対等な関係」と考えた。

「私という存在は世界でただ1人。違いを認め、1人ひとりの天分を生かすと、どんな人も可能指数は200持っている。能力とは、誰でもできることをやり続けること。知的障害者は一度やり始めるとコツコツとやりぬき、私たちのほうが逆に3日坊主という体内時計を持っている。彼らは、今を一生懸命に生きています。10年偉大なり、20年恐るべしです」

1期生を雇用してからまもなく10年。1人が世話人、1人がサブ世話人として、仕事をリードできるまでになった。その変化は、川畑さんも当初予想していなかったという。

「最初は、自分の名前を言った後、言葉が出てきませんでした。今は受け答えと気配りもできるようになり、戦力となっています。当時を思うと信じられないですね。人間の能力は、いかにスイッチが入っているかどうかです。1人ひとりがその気になることが一番大切だと思います」

待遇は社員で、給料は13〜14万円。プラス障害者年金が約7万円。一家の大黒柱になっている人も多い。毎月1日は、ネクタイを締めて出勤する。

「その姿を見れば、親もどんなにうれしいか」と川畑さん。

「働き始めてしばらく経つと、お母さんたちがおしゃれになりました。このままではいけないと考えて、通帳は会社、印鑑は親で、毎月3万円ずつ財形貯蓄をしています。親や先生、寮母さんと呼んで感謝の夕べをしています。彼らが成長していくと、親も成長していますね」

「一流と付き合うと一流になる」が川畑さんの持論だ。

「どんな勉強会も、県外の企業視察も一緒。彼らはわからないからと分けないで、同じようにチャンスを与える。朝礼のファシリテーター（司会者）も一緒です。そうすると成長します。社会は多様性がありますが、企業も多様性があつたほうが強いし、楽しい。彼らがいるおかげで、毎日ドラマと感動があります」

いま沖縄教育出版では、知的障害者9



人と聴覚障害者1人が働いている。

## 障害者がリーダーに 後輩を自ら育成できる組織に

総務部室長の長嶺さやかさんの案内で、オフィスから10分ほどの、沖縄都市モノレール（ゆいレール）が走る久茂地川沿いの「配送センター」を訪ねる。2階は健康食品の製作と配送で6人、1階は化粧品品の製作と配送で2人の知的障害者の人たちが働く。

企業の名を有名にしたのが「日本一楽しくて、長い朝礼」だ。月金は合同で、火水木はオフィスごとにその朝礼は行われる。訪れたのは木曜日。朝9時、障害のない方も含めて十数人の朝礼が始まった。

知的障害者9名、聴覚障害者1名が働く沖縄教育出版





日本一楽しくて長い朝礼（デイリーアップ朝礼）、通常は1時間ほどだが、長いときは3時間になることもある



ファシリテーターは、いつもは総務で仕事をしていて、「げんき笑顔隊長」を任命されている入社3年目の知念政臣さん。「おはようございます」と手話を交えてあいさつ。2人1組のハッピー体操などの後、今年4月に入社した仲里治樹さんのリードで、朝の唱和。「〜私たちはみんなで力を合わせて、『人と人、人と自然、人と食の3つの健康のホムドクター』として、お得意様に生きる希望を届けています〜」

続いて今月の標語。全員で気合を入れて作業が始まる。それぞれの手際がいい。「おはようございます」と私たちにあいさつをしてくれた謝花喜和さんは、印刷物の折り機のスペシャリスト。

朝の唱和を担当した仲里さんは、「いろんな仕事をできるようにになりました。玄米酵素の箱詰めは、重いので大変です。仕事は楽しい。みんなと仲良くしています。ずっと働きたい」と笑顔。

障害者雇用の1期生のうちの1人、上原信弥さんは入社9年目で、2年前に製作チームの世話人（リーダー）になった。

「商品の製造がメインですが、配送が多いときは配送に回ります。注



総務で働く知念政臣さん。「げんき笑顔隊長」として朝礼を進行する

意していることは、商品にバーコードがきちんと張られているかどうかの確認です。みんながスムーズに動くので助かっています。みんなには手を早く、スピードを出してほしいと頼んでいます」と上原さんは自覚十分。会社紹介のパンフレットにも登場する上原さんは「沖縄教育出版は、明るくて元気がある、家族みたいな会社。今は自分の役割で精一杯です。きちんとしてくれるようになったら、次のことを考えて、ずっと働き続けていきたいです」と言う。

「（上原）信弥さんは、後輩を育てるためにはどうしたらいいかを考えています。彼をお手本に、次は自分が世話人になるのだという気持ちで、みんな頑張っています」と長嶺さん。

360円、430円など細かい価格のお弁当の取りまとめをしていた饒平名

（よへな）達哉さんも1期生。今年4月からサブ世話人になった。配送センターの世話人（事業部長）の川畑旨史（よしふみ）さんは、「彼はすべての製作ができるので、製作の指導は任せておけば大丈夫です。サブになって、朝早く出勤したりと自覚が出てきた」と仕事ぶりを認める。

「仕事は慣れました。今の仕事が好きです」という1階で化粧品の製作と配送を担当する入社2年目の伊東江梨花さんが、クレンジング水のバーコードシールの印刷を頼みにきた。上原さんが機械を操作して、シールを打ち出す。

川畑旨史さんは社長の次男。「私は何もしていませんですよ」と言いつつ、さりげなく気を配り、定期的に面談も行っている。

「些細な変化を見つけることが大事だと思います。仕事の面で注意することはあまりないのですが、コミュニケーションに気をつけています。障害を持っているからとは意識していません。社員ですから同じようにしかりますし、同じように接しています」

特別支援学校や作業所などからインターンシップ（職場実習）を受け入れています。その成長を見ていて、「環境は大事です。周囲の影響を受けて、集中できなかった子が黙々と仕事をするようになります。先生がびっくりされています。2週

# 職場 ルポ

折り箱を組み立てる  
謝花善和さん



注文の係で平達さん。  
弁当の係で名達さん。  
食の係で名達さん。  
ままとめるリーダーとして活躍している

間経つと顔の表情とかが見違えるようになりますね」と旨史さん。

知的障害者たちは自主的に朝6時半前に出勤。周辺道路の清掃も行っている。旨史さんは彼らの将来について「それぞれの習熟度に合わせて仕事をしています。常に挑戦をさせて、将来的には製作から配送へ入ってもらえればと考えています。簡単なメール便の配送などではできる人もいますが、配送は商品の組み合わせが複雑ですので、応用することが課題として残っています。彼らの中で後輩を育成する、また成長できる組織に持っていきたいと思っています」と言う。

## 小さな会社でも 社会を変える力はある

社長の川畑さんの会社経営への思いは熱い。

「地域の暮らしを守るには、雇用づくり、人づくりが必要です。その土地の人がその土地で暮らせる社会がいい社会です。世の中の真の目的と一致しているならば、どんな小さな会社でも社会を変える力を持っている。そのくらいの誇りと気概を持って、経営していきたいと思えます。未来を担う人たちをしっかりと採用して育てていき、グループ企業をたくさんつくっていききたいですね」



配送センターの責任者、川畑旨史事業部長

グループ企業として10年に「チャーゲンキ本舗」を設立。一流のパテシイエを招き、紅芋生ケーキをつくった。

「基本的には工場や自社ビルは持たずに、人にお金をかけたいですね。最大の企業を目指すのではなく、最良の企業を目指したい。人が成長した分だけ会社が成長すればいいと思っています」

「日本一楽しく、長い」と有名ななった朝礼は、全国の企業などから見学者がくることでだんだんと磨かれてきたと、川畑さんは言う。

「仕事は、短い時間で自発的にチームワークよく集中したほうが成果は上がるものです。朝礼はスイッチを入れる、みんなが情報を共有する場です。また社員が弱みを話せる場になっています。みんな悩みを抱えている、みんなが不完全です。人生劇場と呼んでいます。不完全な者同士が理想を目指して少しでも成長していこうと考えています」

遅刻は許されない。仕事をする心構えができていないから、その日は休んで、また明日がんばりなさいとなる。

「美しい経営を目指していますが、やさしさ、思いやり、楽しさだけではない、その裏には厳しさ、たくましさ、強さがなければなりません。I am OK! You are OK! We are OK! が社憲です。うちはノルマも年間の売り上げ目標もあります。数字でプレッシャーをかけることはないのですが、お役立ち目標は毎月あります」

定年は、働く意欲がなくなったとき。69歳の人や5人もいる。銀行や大学を定年退職して再就職した60代の人たちが一番活躍しているそうだ。

「仕事は自分で自分を管理をします。マニュアルは自分で作りますから、考えることが仕事です。その習慣をつけるために、こうやったら会社がもっとよくなると1人が毎日127字で提案します。経営者は24時間考えているわけですから、会社を良くするために全員で考える。それが習慣になると楽しいんです」

魔法の習慣〇×チェックシートもある。「自分の立てた目標を毎日チェックする。今までできなかったことができるようになることが成長です。人間的に成長すれば、結果的に数字や成果がついてきます。家族以上の人間関係の中で得意様を大事にして、どうやったら生きる希





伊東江梨花さんのシール印刷を手伝う上原さん

入社して9年目、チームリーダーの上原信弥さん



望を届けられるか。与え尽くして、慈愛の種をまく。それが私たちの会社が持っている独特なものではないかと思えます」

## やさしさと思いやりの 企業文化がつくられた

1日1人1提案は、知的障害の人たちも一緒。川畑さんのもとに提案が届く。「ABCもわからなかったのに、パソコンをやりたいと言いついて、仕事を終わった後に毎日続けて、7割の人はパソコンから提案を送ってきますよ。また社員全員の『今日ノート』があります。何時から何時までは何をやるという1日の目標と感想を毎日書いて、金曜日に提出します。私や役員がコメントを書いているので、全員の名前がフルネームでわかります」

上原さんは「全員の入社年月日と顔写



化粧品の製作と配送を担当する  
伊東江梨花さん

真をボードにしたい」と提案。採用されたボードがオフィスに飾られている。

川畑さんは、「彼らだからできないという発想はありません。できないのではなくて、挑戦しないだけです。常に挑戦をさせていく。入社当初、話が全然かみ合わなかった自閉の人は、今は起承転結の話ができ、1つの仕事が終わった後は違う仕事をしています」と言う。

上原さんはまた、おばあちゃんの家に家族を連れて行きたいと運転免許に挑戦。学科試験は、仮免許は9回、本免許は17回も受験した。

「職員が毎日面倒を見ていたのですが、翌日の本免許の試験で同じ問題が出て合格。みんなでバンザイしました」と川畑さんはうれしそうだ。

紹介しきれないほどの川畑さんのさまざまな「語録」には、知的障害者と心が通じると感じるものがある。「感じていることは本音だから、自分に正直になっ

て、ホントに感じていることを相手に伝え、相手の心を揺さぶることからスタートしよう」と話すこともその1つ。

「知的障害者は、本気で手抜きをしません。直球を投げます。彼らが今日を一生懸命生きていることがいい影響を与えています。今までは、品質と効率と規模を追いかければ会社はうまくいきまし



上原信弥さんが提案した  
全社員の顔写真入りボード

た。これからは人間関係の中でいかにお役に立つか。公益企業でないと人は応援しないと思います。いい社会をつくっていくこうというところで、みんなとつながっていくって思っています。私たちがうれしいのは、朝礼研修にいられて障害者雇用を始めた企業が増えていくことです」川畑さんは、1つの願いを話してくれた。

「彼らがいることによって、やさしさ、思いやりの企業文化、土壌がつくられています。見習うことはいっぱいあります。障害者を30〜50人に増やして、彼らだけで経営ができるようにことに挑戦したいですね。彼らが増えてくれば、その中から役員をつくっても構わないわけですから」

川畑さんのその願いが実現したら、ぜひ再訪したいと思う取材だった。